

マルチメディア時代における生産経営実務科の現状と課題

ポリテクセンター中部 生産経営実務科 杉浦 圭一
(中部職業能力開発促進センター)

1. はじめに

グローバルスタンダードが進行する中で、企業責任やメセナ・ISO取得などにより企業イメージのアップや国際競争力を強めるため、企業の経営方針の転換、さらには、ネットワーク化等による情報技術の発達による管理・事務部門の効率化・簡素化、はたまた事務部門や物流業のアウトソーシングなどが進められています。このような状況下で中高年ホワイトカラー層を対象とした生産経営実務科（アビリティコース）が、平成11年1月より、8施設のポリテクセンター（北海道、宮城、関東、富山、中部、関西、広島、熊本）でスタートしました。

そこで今回のテーマである「マルチメディア」に、どの程度そえるかはわかりませんが、生産経営実務科の現在までの状況を報告し、今後の課題と目標について考えてみます。

2. マルチメディア

従来のマスメディアにも双方向やデジタル化の波が押し寄せています。デジタルカメラ・ビデオにより、パソコンに静止画・動画を取り入れることができます。概念も最近の傾向としては、「デジタル化された文字、映像および音声などの情報を伝達するメディア（媒体）がコンピュータによって統合され、多機能端末機器の操作により利用者がネットワークを通じて、メディアを必要に応じて使い分

けながら対話型のコミュニケーションを行うことができる環境である」のようです。何にせよ表現手段としての文書や動画・音声を、パソコンやテレビ・電話・ゲーム機などの変換手段を用いて、ケーブル・無線・衛星通信や磁気媒体などの電送手段でやり取りします。ゲーム機などでも電子メールができる時代になりました。

マルチメディアを利用する利益は、訓練においてはもちろんですが、企業経営についても同様にノウハウの共同利用、技術上の特徴の紹介による社会的な評価の向上等が考えられます。しかし、技術的に未知な部分や法律上の整備等の問題もあり、さらに機密保持（保護）の課題も残されています。

2.1 インターネット

情報化に親しむ手段として効果的です。パソコンの初心者には画面の情報に感動し、十分な興味を抱かせることができます。しかし、疑似体験の世界なので大切なのは実体験です。

インターネットは簡単に多くの情報が引き出せますが、ウイルス等の対策は必要です。また、大切なのは情報を取捨選択し、編集・加工することではないでしょうか。情報リテラシーでは情報を操作する能力を訓練します。パソコン等を駆使し、求める情報を集め、伝えたい情報として加工する力を養うことが大事です。

情報収集と活用条件として、

正確性
活用性

相対性
類推性
補完性
定量性
信用性
経済性

に留意しなければなりません。

インターネットで部品・材料を調達するような世界調達戦略を持つ企業が徐々に増えてきています。

2.2 電子メール

四大通信インフラの1つである電子メールは現在文字中心ですが、将来的にマルチメディア（文字・画像・音声・動画の複合）によるものが主体となると予想されます。瞬時にメッセージを送ることができる「同時性」と受信したメッセージを好きなときに読むことができる「非同期性」、また「同報配信」や「再利用」が特長です。

相手の顔が見えないぶん、普段のコミュニケーションよりも難しい面がありますが、企業間では受発注を電子化するなど、アウトソーシングでは特に情報システムが必要とされており、電子メールに慣れておくことの必要性はますます高まる感があります。

3. 訓練概要とカリキュラム

カリキュラムは製造業の立場から、

情報管理
財務管理
労務管理
生産管理
資材購買・物流管理
生産経営実践

以上の6システムから構成されています。

「マイナスを叩くよりプラスを伸ばす」の観点から、対象となる訓練生のキャリアを生かしつつ、不足する能力および高度で幅広い専門的能力の向上を目的としています。企業の社会的な責任、特にエコロジカルマーケティングや情報化時代における企業

の役割が求められている時代です。コンシューマリズムや情報化時代の消費者対応を踏まえながら、生産管理における専門能力だけではなく、企業経営の総合的管理実務を習得し、製造業における経営を支援・コントロールする実務、管理的職務の遂行ができる人材を育成することを目標としています。

そのためにはSWOT分析（Strengths：強み、Weaknesses：弱み、Opportunities：機会、Threats：脅威）等にありますように、自らの強み・弱みや自らを取り巻く環境（機会・脅威）を把握し、進むべき方向を定めて再就職に備え、自己研鑽を積まなければなりません。これは企業の内部資源（人・物・金・情報）の強みと弱みが、外部環境にどう対応しているかを知り、これからどうすべきかを判断する材料としても有用な技法です。

3日間のそれぞれのユニットの中で課題や事例研究などのグループ討議を行い、各種手段による情報収集をはじめとし、いろいろな企業の経験を持つ方々の理論、知識などを踏まえて議論することにより、よりよいアイデアを生み出すことができ、また訓練生のレベルアップが図れます。

訓練は人々の「思い」で成り立っています。再就職に有利な資格がほしい、パソコンを勉強したいなどの思いは、あらゆる方向から、またあらゆる方向へ向かって流れています。

人間の欲求にも「ディマンズ」「ウォンツ」「ニーズ」があり、「マズローの欲求五段階説」で「生存の欲求」「安全の欲求」「帰属と愛の欲求」「尊厳の欲求」「自己実現の欲求」に分類されています。こうした「思い」に応じた市場がつけられているように、訓練の環境も成り立っているのではないのでしょうか。最終的に求められているものは、訓練生にとって「いいもの」と、訓練として「いいもの」と、さらに両方を包み込む環境（自然・社会）にとって「いいもの」など、3つの視点を持たなければなりません。しかし、コースやカリキュラム内容が訓練生に受け入れられるまでの間には、いくつかの過程があり、両者の「思い」がそれぞれの過程で交錯しがちです。実際に「思い」を一致させていくことが大切であり、その手腕がわれわれに求められている

スキルではないでしょうか。

企業戦略でも多くの情報をミックスさせて集約化を図りながら、情報処理の判断を的確に行う「マーケティング・ミックス」にも通ずるように、いろいろな機能を有効に生かす方法として、それぞれの場面で4Pのどの機能に重点をおけば一番効果的か、そしてその機能の組み合わせ方をどうすれば効果が得られるのかを検討しなければなりません。



4P : Product (製品戦略)
Price (価格戦略)
Promotion (販売促進戦略)
Place (販売経路)

図1 マーケティングの基本的な機能

4. 情報化とデジタル化

「情報」は経営の第四の資源です。情報もネットワーク化・デジタル化が進んでいます。時代は生産者志向から消費者志向の時代へと移り、製造業においては多品種少量生産に変遷してきています。情報システムのコンセプトも「SIS」から「BPR」・イントラネットからエクストラネットへと、移り変わりも目を見はるものがあります。

授業を行う際の補助教材をはじめとして、環境問題の観点や保管性などを含め、すべては無理ですがペーパーレス化に取り組みなければならない現状です。その点で写真や図表等のデジタル化は大変重要しています。板書や紙なども大事ですが、直前まで修正が可能であり、見栄えの良さや音声・動画効果を加えることにより、訓練生の関心を引きつけることができます。また、保管・検索・再利用の点で

も優れています。

グループ発表における「表現の多様性」に、プレゼンテーションソフトの使用があります。文字や図表、音声から画像などを効果的に配置することができます(デザインなど個性の問題はありますが)。模造紙等で行うこともありますが、基本は何を相手に訴えたいかという意味疎通ではないでしょうか。どんなにすばらしい計画・立案や手の込んだ成果物であっても、相手に伝わらなくては無意味です。あくまでパソコンはツールであることを認識し、決して自己満足にならないよう留意しなくてはなりません。聴講している方の注意を引きつけ、そして理解していただく。そこに存在するのは、コミュニケーションです。「face to face」身振り手振りを含め熱意と話術が介在します。

いかにコンピュータが進化しようと、所詮はツールとしてとらえ、話術などにも磨きをかけていかなければなりません。

訓練生のパソコンとの関わりは、
インターネットによる情報検索・収集
電子メールの交換
分析・シミュレーション等の活用
プレゼンテーションでの活用
LAN環境におけるデータの共有化
補講や自学自習

GUIに変化したインターフェースにより操作が簡単になったとはいえ、クリック・右クリックと説明されても慣れるまで大変のようです。時間系列でとらえてみれば徐々にスキルアップしていると感じています。

現在求められるスキルとしては、ヒューマンスキル(人間性)、テクニカルスキル(コンピュータの活用)、コンセプチャルスキル(何をどうしてどうするのか自分で考える)等が考えられます。個人のコア・コンピタンスを把握し、対処していかなければならない時代です。

製造業の合理化の基本目標は、
Productivity (量的な生産性)
Quality (品質)
Cost (コスト)



プレゼンテーション風景

Delivery (納期)

Safety (安全)

意思決定の迅速化・分権化・柔軟化, 情報についてはリアルタイム化(共有化・一元化), 業務遂行はコンカレント化などが求められています。これらによって, 競争優位に立ち, 併せてCS向上が図られます。

企業の情報に対する考え方は, 情報の共有化や一元化によりスピードある経営判断を実現し, 多くの情報の中からいかに編集し直して, お客様にどのように返すかが問題であり, 情報分析を生かすGDPやSCMによる情報の双方向性・情報のスピード化が求められています。

5. 今後の課題と展望

入所された方々の内訳としては, 販売・流通関連の方が過半数であり, 製造現場を経験していない点にあります。これにより, 製造方面で使われている用語やイメージがとらえきれいていません。座学だけでは難しく, ビデオ等により補足しています。しかし, ビデオにしても各種多様なものがあり, どれが訓練に最適であるかを絞り込む必要があります。

また, パソコンを以前使われた方が少なく, 基本操作段階から習得していただかなければならない点がありました。訓練生には多い「食わず嫌い」が存在し, 起動・マウス操作などといった初歩からホームページの閲覧方法や各種アプリケーションの活用までには時間が必要です。

3ヵ月ごとに入所・修了を行うため, 情報管理ま

たは生産管理システムからスタートするコースに分かれます。したがって, 訓練生のパソコン習熟度によりかなりのレベル差が生じてしまいます。パソコンも“慣れ”の部分がかなりのウェートを占めていますが, 訓練生にはなかなかの方も見受けられます。訓練生相互のアドバイス, 操作方法のビデオや補講だけでなく, 使い方の説明や実際の操作画面が表示されるCD-ROM教材を使用し, 自学自習に取り組んでいただく方法などで対処していますが, 訓練の進度に追いつかない状況です。しかし, プラス思考で楽しみながら実力を養っていただきたいと思っています。

問題は, 訓練生がどれだけの量のデータを自分に役立つ情報として収集し, 自分流に編集して将来に役立てることができるかどうかです。今はその能力が試されている時だと思えます。

情報共有に関しては, 確かにいろいろな情報を共有することは悪いことではありませんが, 機密の問題を含めて皆が何でも知ればいいというものではないと思います。とにかく何かをしているなと思ったら, 一生懸命に情報を見ている, 知ることは悪いことではないですが, 知らなければいけないということとは別問題です。このあたりをうまくコントロールしないと, ただ便利だから情報を見ているということになりかねません。

6. おわりに

デミングサークルというものがあります。活動はP(プラン), D(実施), C(評価), A(対策)の繰り返しです。訓練においても, どうすれば効果的な訓練が行えるか計画・実行し, 受講生の理解はどうであったか, 進め方は適切であったかの評価があり, 次にどう反映するかを繰り返していきます。

昨年9月より研修を受け, 未知なる分野に取り組んでいます。現在OJT研修で物流管理・生産管理等を受講しています。部外講師(中小企業診断士)の経験と力量には遠く及びませんが, 今後の自己研鑽で少しでも前進すればと思っています。マルチメディアの進歩と「同期」できれば幸いなのですが。